

## [書評]

Cécile Backès, *Anthologie du Théâtre français du 20<sup>e</sup> siècle*, coll. Folio plus classiques, Gallimard 2011.

佐伯隆幸

レトロスペクティブの兆候か、とり立ててめぼしい現象が目下みつけにくいということなのか、今世紀も十年を経た前後から、終わったばかりの世紀の演劇をふり返る書がよく出る（「20世紀前衛」というのはあっても、20世紀演劇なる呼称は用語としてやや荒っぽい。それでも、「今世紀最大の舞台」を謳う芝居が幾分前にあった東京よりは数段まし）。すでに挙げたアヴァン＝セヌ社のものは浩瀚で読み応えがあるが、そっちは17、18、19世紀とともに各一巻ずつで全体を成す大掛かりなものだから、単独では紹介しにくい。こちらは文字通り劇テキストの選文集である。ゾラ、アントワーンにはじまり、クローデル、ジロドゥ、サルトル、カミュを経て、ベケット、イヨネスコ、ジュネ、ヴィナヴェール、デュラス、シクスー、コルテスからラガルス、ミンヤナ、ノヴァリナ、ヤスミナ・レザにいたる、今日までのフランス演劇の流れを総覧したもの。コンパクトな構成のわりには、魅力的。歓迎すべきは、各作家の代表作の抜粋が、初演時の作者の位相、演出家のアプローチの言、当時の新聞記事や批評の切抜き、その後の上演史とともに分かりやすく配置されていることだ。演劇史入門としては好著と思える。たとえばジュネは『屏風』が提示されているのだけど、初演時の騒動がマルローの国会での発言などと相俟って如実に浮上ってきて、追体験には絶好。加え、『クリストフ王の悲劇』のエメ・セゼールや『アゴンダンジュを遠く離れ』のジャン＝クロード・ヴェンゼルなど思いがけないものまで入っているし、ブレヒトの問題やドイツ・オーストリア演劇との相関性なども簡潔にふれられているから、現存作家に限らず、フランス演劇のテキストが20世紀にどう変わってきたかの礎石を知るには有益である。直線で進んできたわけではむろんなく、かなりジグザグと展開、各時代状況の函数のように劇はあったということが肉迫的に把握でき、興味深く、また巻末に収められたコポーやデュラン、ピイの演出をめぐる論も役立つし、なかんずく、ポール・デルヴォーの一枚の絵をめぐ

り、劇場＝炎論のエッセイ（アンリ・スケピ執筆）は出色。ただ、コンパクトゆえの難がないわけではない、最前のジュネだが、バローの初演と比較的最近のフィスバック演出、とくに後者は結城人形座を含めて詳述されているが、シェロー演出にはあまり筆が割かれていないとか、「演出家の時代」の演出陣の名は出揃ってはいても、みな後景にされていることや、『アトリエ』のグランベールの評価が異様に高い（どうも大筋「フランス座」史観なのだ）など、筆者には若干疑問もなくはない。そこはまあ当方のないものねだり、よかれあしかれ、これが現在の演劇史的眺望なのだろう（重要な結節点は述べられている）。その意味で、本書は今後の基本文献、批評的に咀嚼されるとよい。

